

地方創生とは何か

現在、地方の再活性化をめぐる議論が政府を始めとしてさかんである。たしかにグローバル経済の言説を御旗にして、国境を越えた企業戦略が一般的になり、それまで、重厚長大型産業の国内生産における受け皿であった地方の雇用は、生産工場の海外移転によって大きな打撃を受けている。ここ1-2年日本の貿易赤字は持続している。為替市場が円安局面に移行しても、もはや海外に生産拠点を移転させてしまった企業が、国内に回帰しないことが原因のひとつであろう。海外生産と国内回帰が繰り返されてきたが、ここに至って、後者の動きは円安に

もかわららず抑制されたままである。

筆者はこの夏、科研費による地域調査に参加して、2つの地域の現状にふれることができた。第1の地域は、広島県の熊野町である。熊野といえば普通思い浮かぶのは、紀州の熊野である。まったく同じ地名であり、

それには由来もあるが、ここで注目したいのは、この熊野町の地場産業である「筆」生産である。江戸時代の農閑期の仕事として筆の生産が始まった。もちろん、当時の日本では、主要な筆記手段として全国各地に筆産地が存在した。その後、第2次世界大戦以後、書道教育が後退するなかで、熊野の筆生産も衰退したが、それにもかかわらず、絵筆として生産は持続した。

そして、その後の決定的なヒットとなったのが化粧筆の生産である。それまで、化粧用筆は絵筆の感覚でしか生産されていなかった。だが、この熊野で生産されると、まったく品質の異なる高級品が生産され、それが欧米の市場でOEM商品として注目を集めた。従来のごらざらした筆ではなく、顔の皮膚にきわめてデリケートな「スペース」の

タッチを与えてくれる。そして、現在では、OEM生産と並行して、自社ブランドによる生産が中心であり、輸出も隆盛である。

第2の例は、福井県鯖江市のメガネ産業。今やイタリア、中国とともに日本は世界のメガネ枠の世界3大生産拠点であるが、日本のなかでは鯖江が主要なシェアを占めている。このメガネ作りも農閑期の農家の仕事に由来する。明治時代までさかのぼることができ

から、100年以上の歴史を有する地場産業である。メガネ生産の統合的なメーカーを目指す経営者が登場して、自社製品を国内そして海外でショーケースを持って参して、メガネ販売店を一軒ずつ開拓していったという。

そのメガネ生産であるが、ご多分にもれず、中国の安価な製品が登場して大きな打撃を受けている。それでも、生き残っているのは、メガネ生産の技術を応用して、医療器具や楽器の部品にまで展開させて、その生産比率を高めているからである。筆と同様に、メガネの輸出もさかんである。

このような地域の活力は日本の他の地域にも数多く存在している。そして、地域の活力に貢献している。モノ作りのDNAを現在に継続させている企業にこそ、サポートの力添えがあって然るべきである。

筆者は、その後の決定的なヒットとなったのが化粧筆の生産である。それまで、化粧用筆は絵筆の感覚でしか生産されていなかった。だが、この熊野で生産されると、まったく品質の異なる高級品が生産され、それが欧米の市場でOEM商品として注目を集めた。従来のごらざらした筆ではなく、顔の皮膚にきわめてデリケートな「スペース」の

タッチを与えてくれる。そして、現在では、OEM生産と並行して、自社ブランドによる生産が中心であり、輸出も隆盛である。

第2の例は、福井県鯖江市のメガネ産業。今やイタリア、中国とともに日本は世界のメガネ枠の世界3大生産拠点であるが、日本のなかでは鯖江が主要なシェアを占めている。このメガネ作りも農閑期の農家の仕事に由来する。明治時代までさかのぼることができ

から、100年以上の歴史を有する地場産業である。メガネ生産の統合的なメーカーを目指す経営者が登場して、自社製品を国内そして海外でショーケースを持って参して、メガネ販売店を一軒ずつ開拓していったという。

そのメガネ生産であるが、ご多分にもれず、中国の安価な製品が登場して大きな打撃を受けている。それでも、生き残っているのは、メガネ生産の技術を応用して、医療器具や楽器の部品にまで展開させて、その生産比率を高めているからである。筆と同様に、メガネの輸出もさかんである。

このような地域の活力は日本の他の地域にも数多く存在している。そして、地域の活力に貢献している。モノ作りのDNAを現在に継続させている企業にこそ、サポートの力添えがあって然るべきである。

筆者は、その後の決定的なヒットとなったのが化粧筆の生産である。それまで、化粧用筆は絵筆の感覚でしか生産されていなかった。だが、この熊野で生産されると、まったく品質の異なる高級品が生産され、それが欧米の市場でOEM商品として注目を集めた。従来のごらざらした筆ではなく、顔の皮膚にきわめてデリケートな「スペース」の

タッチを与えてくれる。そして、現在では、OEM生産と並行して、自社ブランドによる生産が中心であり、輸出も隆盛である。

第2の例は、福井県鯖江市のメガネ産業。今やイタリア、中国とともに日本は世界のメガネ枠の世界3大生産拠点であるが、日本のなかでは鯖江が主要なシェアを占めている。このメガネ作りも農閑期の農家の仕事に由来する。明治時代までさかのぼることができ

から、100年以上の歴史を有する地場産業である。メガネ生産の統合的なメーカーを目指す経営者が登場して、自社製品を国内そして海外でショーケースを持って参して、メガネ販売店を一軒ずつ開拓していったという。

そのメガネ生産であるが、ご多分にもれず、中国の安価な製品が登場して大きな打撃を受けている。それでも、生き残っているのは、メガネ生産の技術を応用して、医療器具や楽器の部品にまで展開させて、その生産比率を高めているからである。筆と同様に、メガネの輸出もさかんである。

モノ作りのDNA

継続企業こそ支援



名古屋市立大学大学院
経済学研究科教授

井上 泰夫氏

いのうえ やす
お 制度経済学。
パリ第2大学。1
951年生まれ。

